

物語読解とその体験への介入による他者理解能力向上効果の実践的検討

小山内 秀和(浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 講師)

◆問題意識と本研究の目的◆

日常生活において他者を理解することは、子ども期から成人に至るまで、コミュニケーションをはじめとした複雑な社会生活において基礎となる能力である。近年、物語を読むことで他者の思考や信念、欲求、意図などを推測する能力である「心の理論」が向上することが報告され、学問的、実践的な注目を集めた(Kidd & Castano, 2013; Mar et al., 2006, 2009)。報告者は第8回の助成を受けて、大学生と小学生を対象に、物語読書量と心の理論との関連を検討した。その結果、成人において、両者の関連の背後に物語をどのように体験するか、とりわけ物語に入り込み登場人物に共感する「没入体験」が関与している可能性を示唆した(小山内他, 2015, 2016)。しかしながら、物語を読むこと自体が持つ社会的能力への効果に関しては、十分に検討することができなかった。さらに、上記の「物語読書と社会的能力との関連」に対して、その効果が見られないとする研究が複数報告されている(Panero et al., 2016, 2017; Samur et al., 2017)。以上のことから本研究では、(1) 物語の読書について「蓄積としての読書量」と「単一エピソードとしての物語の読み体験」の二つの側面について、心の理論と物語への没入体験との関連を検討する、(2) 心の理論を測定する課題として、先行研究で用いられている Reading the Mind in the Eye 課題(MIE 課題; Baron-Cohen et al., 1997, 2001)を用いる、という二つの目的を設定し、以下のような実証的検討を行った。

◆実験1◆

【方法】

大学生 86 名が実験に参加した。参加者は、読書量を測定する作家名再認テスト、物語への没入を測定する LRQ-J 質問紙(小山内・岡田, 2011)、心の理論を測定する MIE 課題(Adams Jr et al., 2010)に回答した。

【結果と考察】

分析の結果、LRQ の得点は作家名再認テスト得点 ($r = .25, .28$) と関連が見られたが、再認テスト得点と MIE 課題の得点との間に関連はみられなかった ($r = .15$)。このことは、物語の読書量が多いほど没入体験は強い傾向にあるものの、読書量と心の理論との間の関連は見いだされなかったことを示している。

◆実験2◆

【方法】

大学生 76 名が参加した。参加者は、まず事前実験として実験 1 と同様の MIE 課題を行い、その 1 週間後に、物語文か説明文のどちらかの文章を読んでもらった。その後、読解中の没入体験を測定し、さらに MIE 課題に再度回答してもらった。

【結果と考察】

物語文、説明文の二つの条件で、読解前後の MIE 得点の差を比較したが、有意な差は見られなかった。また、課題文の条件、読解時の没入体験、さらにその交互作用を独立変数として、MIE 差得点を従属変数とした重回帰分析を行ったが、いずれの変数も有意な効果は見いだされなかった。一方、読解後の MIE 得点は、物語文条件において、没入体験との間に弱い正の相関がみられた。このことは、物語読解後の心の理論パフォーマンスに、物語にどれだけ没入できたかの個人差が関与している可能性を示している。

◆本研究の成果と結論◆

本研究の結果は、物語を読むことが社会的能力に与える効果を支持するものとはならなかった。近年の研究成果においても、物語の効果についてはまだ議論の途上であり、物語の読みと心の理論との関連については結論を見ていない。しかし、本研究は、両者の関連にどのような変数が関与しているのかについて一定の示唆を与えている。今後、物語の効果を実践現場でさらに活かせるようにするためにも、読書と社会性の発達の問題についてさらに検討を加えることが必要である。